

文化講演会

斎藤別当実盛公と妻沼地域の句碑、俳諧について



熊谷市江南文化財センター

熊谷市教育委員会

社会教育課文化財保護課

山下 祐 樹 先生

平成三十年九月九日(日)

(この講演は多岐に渡りましたが、紙面の都合で一部分のみとさせていただきます)

私は妻沼びいきなところが多くありまして、昨年度五周年でしたが、歓喜院聖天堂が国宝に指定されたときの市の担当者でした。県内初めての建造物の国指定ということ、なかなか県で初めてのことをやるというのは、いろんな意味で大変な部分がありまして、その前の平成の大修理をやった後、それがきっかけとなつて、工事の際にいろんな技術が判明をして、それがいわゆる国指定を後押ししたというふうになっております。

今日は実盛公の話と、その句碑というところのお話をしたいのですけれども、特に実盛公の歴史を語るときに、皆様も知っているのが松尾芭蕉の「奥の細道」の中に「むざんやな甲の下のきりぎりす」という俳句を聞いたことがあるかもしれません。これは江戸時代の俳聖と言われ、俳句の日本の歴史の中でも第一人者であった松尾芭蕉が、斎藤別当実盛公の亡くなったときの物語、それは史実としてあるわけですが、それに感銘を受けてつくったものがあります。

句碑、俳諧について

芭蕉の俳句についても江戸時代のものも多くありますけれども、実際見てみると昭和になってからも数多くの句碑が建立をされています。妻沼の地域というのは、そういう過去の長く俳句としてつくることによって、俳句は永遠のものになりますけれども、過去に生きた俳人、そして永遠に残る俳句、それに愛着を持つた方々が非常に多くいたということ、そういう俳人、俳句をやつた方々によって建立されたものというものも熊谷市内には多くあつて、特に妻沼は非常に多くの句碑が残されています。

昭和になってから、皆さんも知っているかもしれませんが、猪俣千代子さんという妻沼出身の俳人もいたり、あと鷲林子ということ、堀越敬紀さんという地元の俳人の方もいました。その方が中心となつて句碑を建立するという動きがあつて、妻沼にあつた歴史を、まさに無形の歴史だつたものを有形として残していくという役割を果たしたのが、昭和になってからの妻沼を中心に活躍した俳人であつたということ

であります。

私自身、こういう俳句のかかわり合いの中で、何で句碑にたどり着いたのかなと思つているのが、特に『熊谷ルネッサンス』のときに金子兜太先生の最晩年について、いわゆる『熊谷ルネッサンス』のタイミングも非常によかつたのかなと思つているのですけれども、その後にお亡くなりになつたときに、師匠として仕えている方については金子兜太先生なのかもしれないけれども、ここでは敬称として兜太さんというふうに言い、兜太さんの足跡として残つている句碑というのがどこにあるのかというの、まずきっかけになつていふと思つています。

そして、個人的に調べていく中で、熊谷の中にはこういう句碑があるのだなど、再発見したということになります。

兜太さんの句碑というものが市内には七基あり、それを調べていくうちに実は芭蕉もあるのだよということになります。

私が、句碑物語をつくっていく中で、そういう実盛、芭蕉、そして兜太、それが実はつながっているのではないかと。まさに実盛公からいろいろな人物を紹介して我々はつながっているということが言えるのではないかなと思つています。

そういう意味で、こういう句碑を通して私が考えたことというものをここに示したところではありますけれども、芭蕉、そして兜太、俳人の新たな句碑文化をいかに継承してい

くかという問題とも関係してくるのではないかなと思つていますが、こういうことで熊谷の句碑を通して妻沼の歴史を知っていただくと一つ、機会になつていただければなというふうに思つています。

(文責 編集部)

